



Best Doctors®



今月のベストドクター
公益財団法人 がん研究会有明病院
院長補佐・乳腺センター長
大野 真司 先生

すべては乳がんから女性を守るために conquer cancer(がん撲滅)を目指して

学生にチーム医療を学んでもらうワークショップの運営から、一般女性を対象とした乳がん啓発イベントまで。臨床はもちろん、乳がんの患者、サバイバーのための社会環境整備を含め、八面六臂の活躍をする大野真司先生。この春から、がん研有明病院乳腺センター長を務めている大野先生に、乳がんを取り巻く状況、課題などを伺った。



公益財団法人 がん研究会有明病院
院長補佐・乳腺センター長

大野 真司 おおの・しんじ

1984年九州大学医学部卒業。89年米国テキサス大学腫瘍学研究員。九州大学病院助手、講師などを経て、2000年九州がんセンター乳腺科部長、12年同センター臨床腫瘍研究部長、14年同センター臨床研究センター長。15年4月よりがん研究会有明病院乳腺センター長。

日本乳癌学会、日本外科学会、日本消化器外科学会、日本癌治療学会、日本ハイパーサーミア学会、日本胃癌学会、日本コンピュータ外科学会、日本創傷治療学会、日本サイコオンコロジー学会、米国臨床腫瘍学会（ASCO）、米国外科学会（ACS）などに所属。

乳がんの早期発見の重要性をはじめ、サバイバーシップの支援など積極的に啓発活動を展開。若年性の乳がんや、乳がんと妊娠についての研究の第一人者。

乳がんで苦しむ人を 1人でも多く救いたい――

がん研有明病院乳腺センター長の大野先生は、乳がんという病気に対して、臨床のみならず多角的に関わってきた。例えば、日本乳癌学会学術教育部門国際委員会委員長としては、「今、日本乳癌学会を通じて、ヨガを広めようと思っているんです」と大野先生。ヨガには、不安の低減や身体能力の向上など、エビデンスもあるという。「ところが日本では抵抗感があるのか、あまり受け入れられていません。このように、日

本が世界に遅れをとっているけれど、あまり気付かれていないことを積極的に周知していきたい」と語る。このほかにも、大野先生は臨床試験グループ Japan Breast Cancer Research Group 代表理事、認定NPO法人「ハッピーマンマ」代表理事、厚生労働省「若年乳がん患者のサバイバーシップ支援プログラム」責任者、がんチーム医療研究会学術集会「The未来プロジェクト」発起人など、いくつもの顔をもつ。さらに啓発活動として実現した数々のイベントを見ると、ハッピーマンマウォーク、シティウォークinふくおか、福岡タワーのピンクライトアップ、健康づくりフェスタふく

おかなど、敏腕プロデューサーさながらである。「すでに乳がん詳しい人ではなく、乳がんに関心もない人を巻き込まないと、本当の啓発にはならない」と、さまざまな団体・組織とのコラボレーションを仕掛ける。例えば、プロ野球の福岡ソフトバンクホークス。2015年5月9日の試合前、来場者にはピンクのTシャツが配られ、特設のブースでは、鳥越裕介コーチと大隣憲司選手、今宮健太選手がリーフレットを手渡ししながら乳がん検診受診を呼び掛けた。「試合が始まると、ヤフオクドームがピンク一色に染まりました」。少しいたずらっぽい笑顔をのぞかせる。

女性の意思決定に 寄り添う

もちろん臨床医としての評価も高い。「疾病や身体」だけでなく、「こころ・社会・生活・家族」を診るという方針のもと、医師だけでなく、スタッフ一丸となって「患者さんとそのご家族の満足」を目指すチーム医療を実践している。

患者さんだけでなく家族や患者予備群など乳がんを取り巻く人々との多面的な関わりは、すなわち、乳がんという病気のもつ特性と表裏一体だ。「例えば、子育てが終わって、さあこれから自分の人生だという時に思いがけずかかってしまう。また、親の介護が始まるという時に発病してしまう人も多い。乳がんは女性にとって、いろいろな意味で節目を迎え、不安定な時に思いがけず出合ってしまうアクシデントです」

もともと大野先生は「一家の大黒柱を支えたい」と、食道がんを専門にしていた。九州大学病院に勤務していた2000年に、当時の教授の指示により乳がんに向向した時「手術の所要時間、術後管理などから考えて、乳がんなら食道がんの何倍もの手術数をこなせる」と想定していたが、予想は見事に裏切られた。「乳がんは、食道がんの術後管理が大変なのと同じくらい、こころのケアが大変でした。食道がんの患者さんは、60歳代、70歳代以上の男性がほとんど。子どもたちはすでに自立し、妻がしっかり支えてくれます。ところが乳が



NPO法人「ハッピーマンマ」における最近の活動。1 2015年5月9日、ピンク一色に染まったヤフオクドームの観客席。2 試合前、特設ブースで乳がん検診のリーフレットを来場者に手渡す福岡ソフトバンクホークスの選手、コーチと大野先生（左から2人目）。3 医療者を目指す学生を対象に、チーム医療について学ぶ「The未来プロジェクト」の実行委員と大野先生（後列右端）。4 乳がん啓発の重要性をアピールするため「博多どんたく」にも毎年参加している。写真はハッピーマンマ理事のみなさんと大野先生（後列右端）。

んの場合、子どもはまだ小さく、夫も働き盛りで余裕がないなど頼りにならない。また、妻の病気を受け入れられず適応障害を起こすなど、夫が第二の患者さんになってしまったり、病気の妻と、妻を支えられない夫との関係が悪化し離婚へ至ったりするケースもあります。このように、周囲が支えられず本人が頑張らなくてはいけないことが多いんです」と大野先生は話す。

乳がんは、治療の選択肢の多さに加え、そこに患者さんの意思が強く関わることも大きな特徴である。「全摘が必要ですと言っても、乳房にメスを入れるのは絶対嫌ですと言う人もいれば、部分切除でいけますと言うのに再発が怖いので全部取ってくださいと言う人もいます。かといって、患者さん一人では決められません」。一人ひとり異なる意思と背景をもつ女性とその家族をまるごと視野に入れながら、最新の情報を加味

し、意思決定に寄り添い、納得できる着地点を見つける。これも大野先生の大切な仕事である。

傾聴の大切さを知り 「聴く告知」を実践

そんな大野先生だが、乳がんに向向した当初は自分の説明が患者さんに通じず、大いに戸惑ったという。検査の結果を伝え、病期、転移の可能性、考え得る治療法など、必要な情報はすべて丁寧に説明し、「分かりましたか？」と患者さんに水を向けると「……私は乳がんなののでしょうか？」と、それまでの話をまるで聞いていないような反応が返ってくる。「だからさっき説明したように……」と説明を繰り返していた大野先生は、乳腺科外来を「だから外来」と自ら名付けていたという。



外来風景。がんと告知する必要がある場合も、できるだけ「がん」という言葉は使わず、「あなたの予想していた通りでした」「検査結果は良くありませんでした」とだけ告げ、患者さんが頭と気持ちを整理するのをじっと待つ。その後患者さんから出た質問に、ユーモアを交えて説明すると、患者さんは泣きながらも笑顔を見せ、がんに向向かう気力が生まれるという。

ある日のこと。いつものように説明をする
と「どうしても手術を
しなければだめです
か?」と聞かれた。い
つもなら「だから……」
と説明を繰り返すところ、ふと「どうしてそ
う思うのですか?」と
聞き返してみた。する
と「子どもの卒業式が
あり、日程が重なって
しまう」との返事が
返ってきた。その一言
を聞いたとき、大野先
生は脳天を割られるよ
うな衝撃を受けたとい

う。「私が病気の説明をしている間、患者さんはず
っと家族のことを考えていたのです。がんという言葉
を聞いて頭が真っ白になりながら、それでも必死に家族
に思いを巡らしていた。しかし自分はそれに気付かず、
一方的に自分のペースで話していたのでした」。すぐ
さま心理学の本を読み漁り、「聴くこと」の大切さを
学んだ。

本人に話してもらおう。話しながら頭を整理できるよ
うに、こちらはうなずきながら話を聴く。「こうして“聴
く告知”に取り組みました。がんという言葉を使う代
わりに、病気が良くなかった（Not Good）と伝えて
から、少し時間をおく。黙って患者さんを見てると、
こころの動きが見えるようになりました。不安な表情
が変わっていき、最後には決心のついた表情が宿りま
す。そのタイミングを逃さず、『お聞きになりたいこ
とはありますか』、と尋ねるようにすると、その先は
スムーズに進むようになりました」と大野先生。

「臨床において医師が患者さんから学べることは山ほ
どありますが、学ぶチャンスはどんどん通り過ぎて
行ってしまいます。アンテナを鍛え、患者さんが発す
るメッセージを逃さずキャッチしなければ」



カンファレンスは毎朝8時から1時間行われる。メンバーや規模は日によって異なるが、多い時は30人を超える。メンバーの意見
交換により情報の共有化を図り、治療や手術の方針を確認する。スタッフ間の信頼を深め、チームを成長させる場でもある。

世界に 追い付くために

近年がんの治療は、臓器別ではなくタイプ別に分類
し、タイプごとに治療法を選択する個別化治療の時代
に入った。大腸がん、乳がん、肺がんといっても、実
は相互に同じタイプが含まれていることがあると分か
りは始めている。共通の遺伝子変異などが見つかり、
目下はそれをターゲットとした創薬が注目されてい
る。しかし、こうした分子標的薬と呼ばれる薬の開発
は、もっぱら海外が舞台だという。「日本は、臨床と
研究の架け橋の部分、いわゆるトランスレーショナル
リサーチが遅れています。研究成果そのものに差はな
くても、臨床応用につなげる力が弱い」と大野先生。
患者さんの側から見ると、薬価や検査費など治療コス
トに跳ね返ることになる。「一方海外では、一般の市
民や企業から数十億円という寄付が集まり、研究や啓
発事業に大きく貢献する文化があります。この違いは
大きいですが、そのなかでも『ヒト、モノ、カネ』の
適正な配分を目指し、世界に追い付くため努力を続け
ていくしかありません。医療者としては、明日の医療



手術室に立つ大野先生（写真右）。執刀は宮城由美乳腺外科副部長（写真中央）。静かなオルゴールの曲が流れる中、丁寧に乳房にメスを入れる様子をサポートしながらアドバイスする。

を今日より良くしていかなければ意味がない。そのためは、臨床研究、臨床試験が本当に大切です」と、大野先生は力を込めて語る。

サバイバーシップ支援も 乳がんに関わる医師の大きな役割

現在、大野先生が参加する国際的臨床試験は「乳がん女性と妊娠」に関わるものだ。全世界から550人の患者さんを集め、ホルモン療法と妊娠の関係を科学的に明らかにする。

「妊娠」という言葉を聞くと、大野先生は決まってある患者さんを思い出す。20年ほど前のこと。彼女はホルモン療法を受けていたが、妊娠を望み悩んでいた。子どもが欲しいから治療をやめたい。でも、やめたら再発が怖い。義母からの「赤ちゃんまだ？」という再三の言葉にも追い詰められていた。「当時は、治療を継続した場合や中止した場合の再発率、妊娠率、催奇

性の確率など、情報が全くなかったんです。適切なアドバイスもできず、話しながら涙を流す彼女と向き合うだけでした」。大野先生の表情が、一瞬寂しげに陰る。

今回の臨床試験の結果がまとまれば、妊娠に悩む乳がんサバイバーたちが納得し、安心し、そして満足できる選択肢をさらに提示できるようになるかもしれない。乳がんはサバイバーが多いがんでもある。「サバイバーが社会でどのように生きていくか、サバイバーシップをしっかり支援することも乳がんに関わる医師の大きな役割」と、大野先生は語る。

「病む人に備える」

今年（2015年）4月に九州がんセンターからがん研有明病院に移って数カ月。規模の違いは、想像以上に大きかった。スタッフは約3倍、1日の外来患者数は約5倍。「これだけの大所帯をまとめるとなると、

一臨床医としてだけでなく、マネジメントもうまく行う必要があります。良い医療を実現するには、患者も医師も満足できる心地良い環境づくりが欠かせません」。マネジメントの参考図書を求めては読み込んで、実践に向けて準備していると語る。

患者さんに接する際の心構えとして、大野先生は「病む人に備える」を挙げる。これは、九州がんセンターの五代目の院長だった塚本直樹先生の言葉だ。患者さんや家族が安心できるための準備を、医師も病院もいつも怠ってはいけないという。準備ができていないときちんとした治療ができないし、傾聴のための心理学も身に付けておかないといけない。患者さんの情報の把握も不可欠だ。「初めての患者さんでも、部屋に呼ぶ時には、すでに勝負がついています。問診票などの情報から、本人をあらかじめきちんと知っておくと、そこに包容力が生まれ、患者さんは安心します。備えるとはそういうことです」。大野先生は、この言葉が好きだという。

「名医とは有名という意味も含む」という大野先生。



執務室にて。臨床と研究から後進の指導、病院運営に至るまで、業務は幅広く、多忙な毎日を送る。奥にあるのは、がん研有明病院に移籍する際、九州・沖縄地区の先生たちから贈られた記念の時計。「時計が見えるように撮って」と笑顔を見せた。

「優れた医師、有名な医師が名医だとすれば、名医と認識されていることは、患者さんに安心してもらえることになります。病院を選ぶ時、いい病院だから、いい医師だから、ここにかかりたいと思ってもらえる。そういう信頼があるかないかは大きいのです。そのためにも、備えが欠かせないのです」



乳腺センターのスタッフと。大野先生は自らの役割を、大リーグのゼネラルマネージャー（GM）に例える。「長期的な視野に立ってチームを強くし、選手を育て、ファンを喜ばせ、球団の経営を安定させるのがGM。病院も同じで、患者さんに喜ばれ、医療スタッフも満足できるような心地よい環境づくりに貢献したいですね」

ベストドクターズ記念盾

ご選出記念楯へのお問い合わせを多々賜り、誠にありがとうございます。予想を超えるご反響をいただき個別のご案内が難しい状況のため、本誌にて概要をご案内させていただく運びとなりました。

お問い合わせ、ご購入につきましては、お手数ですが、下記メールアドレス宛にご連絡ください。折り返しご案内をお送り申し上げます。なお、記念楯は過去のご選出年度（2012-2013、2010-2011、2008-2009、2006-2007）のものも別途お承り可能です。

【仕様】 木目調枠 縦約33cm×横約28cm 重さ約1kg 【価格】 2万4,000円※（送料・税込） 【納期】 お申し込み後8週間程度
※氏名欄に記載する肩書き、学位は「Dr.」「M.D.」「M.D., Ph.D.」等から選択いただけます。

e-mail : bd-tate@bestdoctors.jp (bestdoctorsには末尾に「s」がつきます)



Best Doctors, Inc. (ベストドクターズ米国本社)
60 State Street, Suite 600, Boston, MA 02109 USA
Tel: +1(617)226-3666

ベストドクターズ社 (Best Doctors, Inc) は、1989 年にハーバード大学所属の 2 名の臨床医によって設立されました。今日では、世界 30 カ国、3000 万人以上の方々に、おもに生命保険会社、損害保険会社、企業等を通じてご加入いただいております。

Best Doctors、star-in-cross ロゴ、ベストドクターズ、Best Doctors in Japan は米国およびその他の国における Best Doctors, Inc. の商標です。

本誌は著作権法上の保護を受けています。本誌の一部あるいは全部について、株式会社法研および Best Doctors, Inc. から文書による許諾を得ずに、いかなる方法においても無断で複製、複製、転載することは禁じられています。

ベストドクターズ社日本総代理店 **株式会社 法研**
〒104-8104 東京都中央区銀座 1-10-1 Tel.03(3562)8404